様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４５３３

研究課題名（和文）未来社会志向の単元習作ワークショップと理論の研究-システムと生活世界を手がかりに

研究課題名（英文）Future Society-Oriented Unit Study Workshop and Theory :Research-based on Systems and Lifeworld

研究代表者
金馬　国晴（KIMMA, Kuniharu）

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：９０３６７２７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：未来社会志向の単元づくりを学生や多彩な層の教師や市民が協同して進める単元習作ワークショップを企画して，計34回を，教員の研究集会やその分科会，講義や出前授業，講座，教員研修への導入も試みて実践した。論文や共著に，基本的な流れ，生じてきた論点，条件，そして戦後初期の先駆例と今日的な意義をまとめることができた。学校を超える必然性も見出され，市民が開く研究会などでこそ，システムに抵抗し生活世界を拠点とした論議が模索され得ることを発見した。それらの会からも示唆を受けて，社会や教育の問題を生活現実から考え，その解決策を政治・経済の論理を活用もしながら考え抜くような多数の論考を書き上げることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
１）単元案をその場で創るワークショップを開く試み自体に意義があった。生活・対話の側から政治・経済システムの論理に批判意識を持つことで，逆にシステムを使いこなせる実践を，共同探究する場となった。２）学校の現状からすると，若年化と多忙化の中で，単元づくりが困難となっているが，そこでこそ教師達にとどまらず，学生や市民を集めて習作の場を創ること自体の実践的な意義が明らかにできた。その先駆例を戦後教育史のうちに求めた。３）以上のために，豊富に情報や文献を収集し整理・分析して，必要なものを必要なときに選んで活用できるよう準備しておくことの意義がわかった。こうした思考自体をコア・カリキュラムの応用と捉えた。

研究成果の概要（英文）：　I have planned Unit Study Workshops in which students, teachers and citizens of various levels, collaborate to create units that aims for the future society, and 34 times are held for teachers' research meetings, their subcommittees, lectures and on-site lessons. I also tried and practiced introductions to my lectures and teacher trainings. In the papers and co-authors, I could summarize the basic flow, issues that arose, its conditions, and the pioneering example of the early postwar period and their significance today. Inevitability beyond school was also found, and it was discovered that discussions based on the life-world could be sought by resisting systems only at study events held by citizens. In response to suggestions from those events, I was able to write a number of articles that would allow me to think about social and educational problems from the reality of life, and to think through the solutions while utilizing the logic of politics and economy.

研究分野：教育学

キーワード：ワークショップ　システム　生活世界　抵抗線　コア・カリキュラム　活用　単元案　市民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

未来社会志向の単元習作ワークショップと理論の研究 ―システムと生活世界を手がかりに

１．研究開始当初の背景

過去数回の科研費による戦後初期コア・カリキュラムの研究をヒントに，集会などの参加者がその場で共同してカリキュラムの構成を試みる単元習作ワークショップを着想した。研究者が自ら企画・実践すること自体を実践的な研究関心とし始めた。国内外の社会が直面する様々な問題をテーマとし，単元習作の場を開くことを目標として，システムと生活世界という理論的な枠組みを構築し，理論と実践を相互に深めていくということを研究課題として設定した。

折しも，新学習指導要領やその前の中教審が「社会に開かれた教育課程」をキーワードとした時期であった。だが，学会大会や教育雑誌などでは，研究者や教員の関心がまだ授業の方法や評価に向いており，そこでいう“社会”の内実は十分検討されていなかった。政策側の社会像には，新自由主義やグローバリゼーションといった経済・政治面に偏っているとの批判があり，私もその偏向は，現状に適応する方向へと引きずられかねない点で問題あり，と考えられた。

２．研究の目的

ただし，先行研究にあるような，政治の論理（権力，支配－従属，秩序）・経済の論理（貨幣，利潤，市場，競争，効率）の全否定をするわけではない。それらをうまく活用し尽くす実践や理論と，それを促す社会像（イメージや条件だけでも）の探究とをめざした。

本研究の目的の第一は，理想の社会像を描きその実現を教師や子ども達が共に試みるような未来社会志向の単元を，ワークショップを開いて構想・試作することとした。

目的の第二は，とくにハーバマスの〈システムと生活世界〉論に注目し，活用しながら研究することとした。生活・活動のために，知識・理論を使いこなす（活用する）こと自体が理想であり，その発想や実際のケースを，総合学習などの単元例などとして現実化・実現していく課題であった。

３．研究の方法

実際に，異なる現場をもつ教師と市民・NGO・NPO，学生を同じ場所を設定して出会わせ，社会問題の単元案を共同で試作するような単元習作ワークショップを企画・運営し，講義や研修，講

座で応用していった。事後に省察を行ってメモを蓄積していき，発表の機会をうかがった。ワークショップでの前提や，影響を与えるべく社会に関する仮説として，〈システムと生活世界〉(J・ハーバマス)を活用した。そのためにワークショップをコアとみなして，問題やテーマ，素材を得るため，広く様々な情報，事例を集めた。毎年度，以下のそれぞれを積み重ねていった。

1）研究会・シンポジウム・ワークショップ等に参加して記録を蓄積し，また人脈を作る。

2）従来実施した元教師インタビューの記録を整理し，新たなインタビューと記録を加える。

3）フィールドワークで国内外の学校現場と市民生活の現場などの知見・情報を蓄積する。

4）文献や資料を広く収集し，以上のために活用する。ワークショップ参加者の利用にも備え研究室内に配架していく。とくにコア・カリキュラムについては編集復刻版の刊行を続ける。

４．研究成果

以上の経験や資料を根拠として，ワークショップ報告文や理論研究の論文を執筆・発表し続けた。単元習作のワークショップは，2017～19 年度および 21 年度に計 34 回実施した。報告文の執筆や共著への掲載，および学会発表もできた。大学講義では，付せん紙によるワーク，2020 年度からは zoom でのブレークアウト，ホワイトボード，勤務校の授業支援システムのディスカッション，掲示板，さらには miro，Jamboard を活用し，方法論をつかんで次に活用していった。それらのツールや，通信端末自体に関連して，GIGA スクール，「令和の日本型学校教育」の問題性を考察する論文や総説も複数執筆できた。

研究会，講演会，シンポジウム，公開授業など（2020 年度からはオンラインを含む）に，無料のものも含めて計 1023 件に参加することで，生活世界の側から政治・経済のシステムを活用し新しい場を生み出し得たといえる事例を発見・考察し，論文や総説等にまとめた。具体的なテーマは，コア・カリキュラムとその現代的応用，ごっこ遊び，子ども哲学，環境教育，防災教育，SDGs であり，テスト収斂システム（金馬の造語）やブラックバイトへの批判であった。さらに生活世界側から発したと見なせる理論を加えるに，ベルクソン，ドゥルーズ，ヴィゴツキー，そしてパフォーマンス心理学を関連づけて考察し始めることができ，今後につながる研究関心が得られた。

結果として，学術的な論文としては 6 件（加えて未発表 5 件），雑誌での総説・解説記事としては 10 件以上をまとめた。さらに大学テキスト 2 冊（教育課程，総合的な学習／探究の時間）の編集に研究成果を活用し，他に 1 章分の分担執筆 6 件を担当した。また『戦後初期コア・カリキュラム研究資料集』を 4 期，第 13 巻まで編集・刊行しワークショップや論文に活用できた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 金馬国晴	４．巻 855
２．論文標題 総合をめざす低学年のごっこと模倣ー生活科から連続的に社会科へ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本生活教育連盟『生活教育』生活ジャーナル社	６．最初と最後の頁 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金馬国晴	４．巻 31
２．論文標題 何のために学び、教えるかー哲学、問い、コア・カリキュラム	５．発行年 2020年
３．雑誌名 お茶の水女子大附属小学校、NPO法人お茶の水児童教育研究会『児童教育』	６．最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金馬国晴	４．巻 881
２．論文標題 「幸せになれる余地」を空ける－〈経済－教育〉関係を市場から読み解く	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『教育』	６．最初と最後の頁 83-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金馬国晴	４．巻 2
２．論文標題 戦後初期の単元はいかに構成されたのか-単元習作というワークショップ-	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『横浜国立大学教育学部紀要 I，教育科学』	６．最初と最後の頁 11-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金馬国晴	4．巻 827
2．論文標題 未来社会をイメージする多彩な会	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『生活教育』	6．最初と最後の頁 10-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金馬国晴	4．巻 910
2．論文標題 通信端末による授業の場面展開	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『教育』	6．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金馬国晴	4．巻 862
2．論文標題 「テスト収斂システム」と二つの社会	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『教育』	6．最初と最後の頁 46-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 金馬国晴
2．発表標題 戦後初期教師のコア・カリキュラム経験における理想と現実
3．学会等名 日本教育方法学会 東海学園大学大会 自由研究発表
4．発表年 2019年

１．発表者名 金馬国晴
２．発表標題 教育課程全体における総合(的な)学習(の時間)の位置づけから「見方・考え方」を考える
３．学会等名 日本教育方法学会第22回研究集会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 金馬国晴
２．発表標題 学部生が理想の授業・学級・学校を描く講義－教職課程でできるカリキュラム・マネジメント
３．学会等名 日本カリキュラム学会
４．発表年 2017年

１．発表者名 金馬国晴
２．発表標題 コア・カリキュラムを志向する境界的な学校例 ―戦後初期の動向と冊子類をもとに―
３．学会等名 日本教育方法学会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計10件

１．著者名 金馬国晴、安井一郎編	４．発行年 2019年
２．出版社 クロスカルチャー出版	５．総ページ数 1900
３．書名 戦後初期コア・カリキュラム研究資料集　西日本編　第４・５・６巻	

1．著者名 広石英記、馬上美知、金馬国晴、杉能道明、栗田正行、伊藤貴昭、今野貴之、遠藤貴広、浅野信彦、酒井達哉、林寛平	4．発行年 2020年
2．出版社 一藝社	5．総ページ数 268
3．書名 学びを創る・学びを支える-新しい教育の理論と方法	

1．著者名 金馬国晴編著	4．発行年 2019年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 192
3．書名 カリキュラム・マネジメントと教育課程	

1．著者名 行田稔彦、渡辺恵津子、田村真広、加藤聡一編著	4．発行年 2018年
2．出版社 生活ジャーナル	5．総ページ数 320
3．書名 希望をつむぐ教育－人間の育ちとくらしを問い直す	

1．著者名 山﨑準二編著	4．発行年 2018年
2．出版社 学文社	5．総ページ数 200
3．書名 教育課程 第二版	

１．著者名 金馬国晴、安井一郎編	４．発行年 2018年
２．出版社 クロスカルチャー出版	５．総ページ数 1950
３．書名 戦後初期コア・カリキュラム研究資料集　東日本編　第１・２・３巻	

１．著者名 金馬国晴、安井一郎、溝邊和成編	４．発行年 2020年
２．出版社 クロスカルチャー出版	５．総ページ数 2000
３．書名 戦後初期コア・カリキュラム研究資料集　附属校編　第７・８・９巻	

１．著者名 金馬国晴、安井一郎、溝邊和成編	４．発行年 2021年
２．出版社 クロスカルチャー出版	５．総ページ数 2200
３．書名 戦後初期コア・カリキュラム研究資料集　中学校編・附属校編補遺　第10・11・12・13巻	

１．著者名 小玉 敏也、金馬 国晴、岩本 泰編著	４．発行年 2020年
２．出版社 学文社	５．総ページ数 200
３．書名 SDGsと学校教育　総合的な学習／探究の時間	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関